

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.182
2018.11.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第24回 ● 型式学の曙光

再び第27図(い)(ろ)(は)の「器物形状の一致」(ゴチック体は引用者、以下同様)に戻り、併せて第28図で「他と稍製法を異にする」とされた(九)と(十二)の記憶を蘇らせれば、(九)と(十二)は夫々(ろ)と(は)の突起部分である。この次元を違える「一致」が「異にする」か、との二様の観察結果は、「互に比較して見ますに、大體は同一形式で有って其中に幾らか宛の変化を持って居る事が分かります」との二重構造に収束する。

次に吟味すべきは「幾らか宛の変化」の背景で、それぞれが既に西ヶ原貝塚の報告(其二)にて「横靈芝形把手の起源」に付いては考へがござりますが、他の把手の事と共に更めて、記す積り故、此所には記しません」と

の予告文に相当する。

そこで改めて第28図の12個について纏め、「突起の比較も好く意匠の移り変りを告げます」と細部を穿つことの意義を宣言するや、直ちに具体的な順序関係を措定することになるが、土器の年代的新古が決定されない未だ途上の考古学であることから、決して単純に順序が決定できるはずはない。しかし、明確な目的として順序関係推定を掲げ、その手続きに型式学の曙光を観るならば、モースの形態学と比較してもこれ以上の高度な議論は望むべくもなく、改めて坪井正五郎の「神は細部に宿る」形態学には恐れ入るばかりである。

ここで説明の便宜上、「拳形」突起を第29図の左側面図に顕著な大きく丸い団扇部、及びその周辺の裾部(第28図参照)に分解する。

第29図で団扇部の凹部が大きく中央にあるのは(一)から(六)までの上段で、下段の(七)から(十二)までは凹部の位置が下にずれたり小さくなり、凹部そのものを失う例さえある。そこで第28図を見ると、右列((三)(六)(九)(十二))は裾部の沈文装飾に特徴を有する例で、裾部の形態が立体的なものから縮退するに従い沈文も細くなる変化が見られることから、上段→下段への移行と右列における凹部の喪失への変化を共に考慮し、(三)→(六)(九)→(十二)というシーケンスを措定する。

同時に沈文装飾を伴わない諸例に対しては裾部の構成が立体的で複雑な(一)に着目し、(一)→(四)(五)→(二)(十一)という

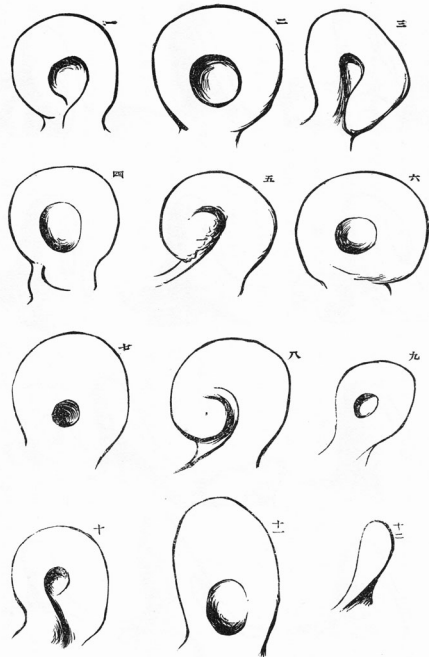
簡素化シーケンスも「明かに見えます」と難なく考案する。

更にここからが坪井正五郎の真骨頂である。導出したのは「意匠の移り変り」の必要条件に過ぎず、年代的に(一)(三)が古く、(十二)(二)(十一)が新しいという十分条件には触れていない。それ故に「私は決して(一)或は(三)が最初の形で他のものは今述べた順序で段々に作られたと考へて居るのではありません。或は簡単の方が前で、複雑の方が後ろかも知れず、一つ本源から出て一方は略され一方は付け加へを得ると云ふ事が有ったかも知れません。唯彼此形状に関する意匠が連絡を持って居るとの事が認められる」と恰もコロボックル説に対してレフェリー役を任じるかの如く思考の柔軟性にこそ真骨頂を見る。

果たして坪井正五郎は「拳形」突起の形態学に二つの目的を課したのである。

第一の目的は、全形を窺える土器群に「器物形状の一致」を見出し、それらの中でも「類似の最も著しい」立体表現である突起に「類似の形態連携論」を適用し、俯瞰による「同一形式」の特定と分布密度から「大森と猪苗代との間に交通の途」を措定することである。

第二の目的は、「彼等の意匠が如何に変化するか」について、「起源」という仮説に向かって具体的な実践を行うことで、双方向の順序関係や変化の複線化についての未決定問題を明らかに示すである。型式学、取り分け「類似度順序形態学」の曙光とする所以である。



▲第29図
「異地方発見の類似土器」所収の「拳形」突起左側面集成

*巻頭連載は隔月です。次回は太村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 型式学の曙光(第24回)	鈴木正博 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第175回)	岡本 洋 …3
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第17回)	間壁忠彦・間壁霞子 …2	■考古学者の書棚 『見る目が変わる博物館の楽しみ方』	藤原怜史 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第17回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

4. 石棺の石材(8) 補遺 亀山石の石宝殿^{いしほうでん}2

前回 私たちは亀山石切り場の只中にある石宝殿を、蘇我氏滅亡直前頃に、蘇我氏によって製作されたものではないかとの文面で結んだ。それは1978年の旧版『日本史の謎・石宝殿』以来の主張(妄想)でもあり、その説明が今回に持ち送りとなったのだ。

『播磨国風土記』の「聖徳王の御世 弓削大連の造る大石」とした石宝殿に対し、弓削大連=物部守屋は聖徳太子摂政の時期には既に滅亡していた。しかも物部氏の拠点地域には二上山系石材の石棺が多い。亀山石で家形石棺や石宝殿のような特異な石造品を作る時期はいま少し新しいと考えた。となると王家か蘇我氏か? ..だが先回述べたように蘇我稲目・馬子の石棺と推定されているのは二上山の凝灰岩。しかし大和の中には、立派な亀山石の石棺も多い。特に菖蒲池古墳の特異な加工の二基の石棺も私たちは当初から亀山石と推定し、発表してきた。かつて石棺石材産地の検討に奔走の頃、菖蒲池古墳の棺形を知っていた上で、材質が亀山石に違いないと実見で認識した時、最初に連想したのが石宝殿だったのだ。石宝殿の製作途上放棄と、蘇我氏の政治的動向と滅亡を思った。私たちが石宝殿を蘇我氏の作と考えたのは、蘇我入鹿・蝦夷時代には、古くからの王権力の象徴でもあった亀山石利用をも、蘇我氏が我が物にしたと思ったからである。いま一つの可能性である齊明天皇制作説に対し、蘇我氏制作を思ったのは、菖蒲池古墳の石棺が亀山石と判断したからであった。

最近(2017年ごろ)では一辺30mの菖蒲池古墳と、すぐ東方で近年実態が明らかとなった、一辺70mの方墳小山田古墳を、蘇我の双墓とし、菖蒲池の二基の亀山石棺を、入鹿・蝦夷の棺と考える人も多くマスコミでは人気ようだ。

だが、石宝殿にたいしては、誰も何も言わない。

~~~~ 私たちの石棺材考古行脚 ~~~~

このシリーズの全体のタイトルは、「考古学の履歴書」ということだが、私たちは少々身勝手に、考古学に関わる仕事の中で、自分達が直面した疑問符ばかりを取り上げてきた。だが考古学に関係するような仕事ともなれば、調査・研究・報告だけではなく。公とは全く関わりのない、地方の私立の小財団法人倉敷考古館の開館は昭和25(1950)年という古いもの。しばらくはこの種の館も少なかった。この開館時に近い頃より、生涯の60年余をここに勤めた二人にとっては、博物館の基本的な仕事も日々の雑用ももちろん、周辺各地との文化財保存関係も普及・教育活動の仕事も一体的なものだったのだ。周辺や各地大学の非常勤講師への出向も多い。各地大学に新設され学芸員養成過程にも依るものだ。

また地域史作成のブームとも言える時代もあり、市町村史関係の仕事もかなりあった。5~6件はあっただろうか。この中には『倉敷市史』をはじめ、『岡山県史』の『考古資料』編(1986.3)もあった。ただこの『県史』の方では、かなりな件数担当の原稿をほぼ書き上げて提出した後で、編集責任者が意に沿わぬ表現を、直接電話してきて掲載を渋ったことで、二人とも全ての原稿掲載を辞退した(もちろん原稿料などはない)。その後県からの連絡は一切なかった。今ではこうしたことを知る人も無いだろう。

このような各地近郷市町村史関係の依頼では、基本は忠彦に対するものが普通で、忠彦が対応し仕上げていた。だがこうした中で、

霞子が編集・記述したものが一件だけある。それが全く偶然にも『高砂市史』。すでに亀山石などの石棺研究を終えており、この市史に関わったのは石棺研究などとは一切関係ない。たまたま霞子が、その頃市史編集を依頼された、神戸女子大史学科の教員だったためである。そうしていかに地元兵庫県の大生まして史学科生でも、石宝殿を知らないかを思い知らされたのである。

『高砂市史』で、『通史』では旧石器時代から、石宝殿前後頃までの時代担当だったが『考古資料編』では、官衙的な墨書土器出土遺跡、寺院址、須恵器・瓦窯址、特に平安末期当地方から京都の寺院に運ばれた瓦の窯址等、注目遺跡も多かった。この中で、亀山石に関わった者として、どうしても今、残さねばならぬ義務があると思った資料があった。地元の江戸時代以降の大形墓地内での、時代別使用石材の違いの比較だった。

現代も使用の続く亀山石切り場にも近い一帯の、阿弥陀共同墓地と、江戸時代以来の港町として栄えた、海辺の町屋にある十輪寺墓地の、二大墓地内での時代別石塔石材検討集成。港町では、早くから和泉砂岩製墓石がある。石材か製品としては別として、和泉からの搬入品。両墓地とも次々と現代の墓石に変化する現今、江戸時代のいわば庶民生活の中の、石材流通傾向データの記録とあったのである。

市内の多くの有志ボランティアの方々の協力で、両墓地全体の悉皆調査をおこなった。大略の内容は『高砂市史 第四巻 資料編』(2007,4年)にあるが、例えば江戸時代後期には、阿弥陀墓地では亀山石墓石は98%に対し、港町の十輪寺では40%、和泉砂岩は56%、花崗岩2%も見られる。明治以降で阿弥陀では亀山49%、花崗岩5%、和泉砂岩23%。十輪寺は5%・56%・24% その他15% ..近い位置ながら、近郷と港町との違いの大きさは、予想以上だった。現在まで既に10数年、このデータもまた大きく変わっているだろう。

倭の五王時代の権威象徴の棺材産地、『播磨国風土記』にも記された岩盤加工の構造物、江戸時代には著名な名所旧跡となりながら、平成26(2014)年10月8日「石宝殿及び亀山石採石遺跡」としてやっと国指定史跡となった。

この地での近現代の墓石調査も、二人での石棺材考古行脚の一環だったと思っていたのである。

間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年 同上館長
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 175

かわらたい
川原平1遺跡 ～青森県西目屋村

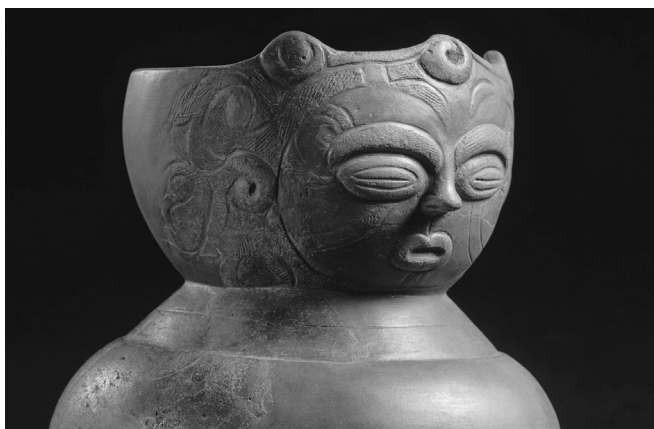
岡本 洋

川原平1遺跡は、青森県の日本海側、津軽地方を貫流する岩木川のの上流に所在します。この地に県内最大となる津軽ダムが建設されることとなり、その工事に伴って2003年から2015年にかけて断続的に発掘調査が行われました。私は青森県に就職した年にこの遺跡の試掘調査に入り、それ以降も本調査・整理作業に携わりました。島根から京都を経て青森に住むことになり、地元の人たちと初めて深く関わりを持った思い出深い遺跡です。また、話題にも上らずひっそりとダムに沈んでしまったという意味で、実に不運な遺跡だと思っています。

川原平1遺跡は縄文時代後期末から晩期を主体とし、ほかの時期には土地利用が希薄です。亀ヶ岡文化の拠点集落を全面発掘した、きわめて貴重な事例です。平坦地に竪穴住居を主体とする居住域があり、その周囲が廃棄域(捨て場)となっています。斜面部分の捨て場は堆積層が2mを超える大規模なもので、平坦地の捨て場は盛土を形成していました。墓域はそれらとは別の場所に設けられ、時期によって地点を変えています。ほとんどが土坑墓ですが、配石墓も伴っており、後期末の石棺墓は県内初の発見でした。本遺跡には日時計状の石組をもつ晩期の配石墓もあることから、先行する十腰内文化から受け継がれた墓の形態とみられ、長野県などにある同じ時期の石棺墓とは系譜が異なると考えています。一方、十腰内文化の石棺墓が切断壺形土器とセットとなり再葬と深く関わるのに対し、本遺跡の石棺墓は棺内が埋め戻されたまま掘り返され



▲縄文時代後期末の石棺墓



▲大洞B1式の人面付注口土器

たりはしておらず、北東北の石棺墓がすべて再葬を前提としたものであるかどうか、再考をせまる調査例となったといえます。

出土遺物はダンボール7,457箱に達し、青森県の発掘調査では三内丸山遺跡の4万箱に次ぐ出土量です。多種多様な遺物がありますが、白眉は人面付注口土器です。鼻が高く、端正な顔立ちの人面が表現されており、作りはとても丁寧です。器形や文様から大洞B1式に属するもので、顔は遮光器土偶成立直前の様子をよく表しています。土偶の製作者と、土器の製作者が共通であることがよく理解できると思います。

面白い遺物としては、文様が描かれた粗製土器があげられます。土器の製作者を知る手がかりとなるため、地味ではありますが貴重な遺物です。くびれがなく内湾気味に立ち上がる器形で底部は若干上げ底であることや、口唇に面取りが施されることなど、文様がなければ概期の粗製土器そのものです。



▲文様展開図

文様は三叉文的な要素もありますが、同時期の精製土器に付される入組帯状文とは異なる不規則で複雑なものです。器面全体に縄文を施文してから沈線を引き、磨消縄文としているとみられます。本遺跡では後期末の粗製深鉢に文様が描かれた例が、少なくとも3点出土しています。焼成粘土塊も多数見つかっており、土器を製作していたムラであることは確かです。岩手県大芦1遺跡では稚拙な文様が描かれた精製土器が出土注目されましたが、製作地ではイレギュラーな土器が存在することを示す好例といえるでしょう。

▲文様が描かれた粗製土器
(高:22.7cm 実測:楳アルカ)

11月21日(水)から1月20日(日)まで、青森県立郷土館において「新説!白神のいにしえー津軽ダム建設に伴う発掘調査成果ととみにー」と題した企画展を開催します。川原平1遺跡をはじめ、津軽ダム建設に伴う発掘調査で出土した遺物を多数展示しますので、ご観覧いただければ幸いです。

青森県立郷土館

平成30年度企画展

新説!
白神のいにしえ会期 11月21日(水)~1月20日(日)
(12/29~1/3は休館)〒030-0802 青森市本町2-8-14
TEL 017-777-1585HP <http://www.kyodokan.com/>

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは松本周作さんです。

考古学者の書棚

「見る目が変わる博物館の楽しみ方」

矢野興一編著／ベレ出版(2016)

藤原 怜史

私は物心つく前から博物館という場所が好きで子供だったらしい。親から聞く話では、土器の前で、恐竜の骨格標本の前で、水槽の前で、絵画の前で、様々な展示の前で何かに取り憑かれたかのように立ち止まって動かなくなることが多かったという。幼き日の自分がどんな感情で展示物を見ていたのか、今となってはすっかり忘れてしまったが、目の前にあるモノを一番素直に楽しんでいた頃なのかもしれない。時とともに楽しみ方は変わり、十代の頃は解説文を最初から最後まで読み、知識を広げることに楽しみを覚えていたように記憶している。大学に入って考古学を専攻し、自分のテーマや興味が絞られてくると、それまでのようにじっくりと解説文を読むことも、場合によっては展示を始めからゆっくりと見ることも少なくなった。自分なりの視点を探し、特定のモノについて考えながら展示を楽しむようになっていった。このころから、考古遺物の展示を見に行く機会が圧倒的に増え、それ以外の博物館へ足を運ぶ機会は少なくなっていった。今では、様々な博物館で展示されているモノがどのように表現されているのか、どうしてそう表現されているのか、そしてどのような工夫がなされているのか、そうした視点で展示を味わうことが博物館での楽しみの割合のなかで膨らんできた。もちろん、今でも特定のモノの前では幼き日のように立ち止まって動かなくなること多々あるのだが。

さて、ここまで私の四半世紀ばかりの人生の中での「博物館での楽しみ方」を振り返ってきた。もちろん、博物館の楽しみ方は人それぞれであるが、この文章を読んでいる皆様にも共感してもらえる部分があったのではないだろうか。これから紹介する「見る目が変わる博物館の楽しみ方」は、どのような事を見せようとして展示がつけられているのかという事に興味を向けさせてくれた本である。そして、考古や歴史以外の博物館と疎遠になっていた私を、様々な博物館へ赴くように駆り立ててくれた本である。ガイドブックのように親しみやすいタイトルとポップな表紙とは裏腹に、鉱物・隕石、恐竜・古生物、菌類、植物、昆虫、魚類、動物、そして考古学の専門家がそれぞれの分野について解説を行った、じつに400ページを超えるボリューム満載の書籍である。考古学の分野については、「石器」、「アンデス文明の黄金・織物・土器・建築」、「瓦」の3テーマを佐野勝宏、鶴見英成、石井龍太の三氏が解説している。

本書では、各分野の資料が持つ特徴や魅力、展示を見る上でのポイントだけでなく、それぞれの分類基準や名前の付け方、そして標本の製作過程など、語られる内容は実に様々である。その中でも、本書の中で分野を超えて語られている内容が、博物館で来館者が実際に目にする展示資料、すなわち標本についてだ。本書で解説されている8つのテーマのうち、鉱物・隕石、菌類、植物、昆虫、魚類、動物のテーマにおいて、標本の作製が一つの大きな題材として持ち上げられて

いる。フィールドからいかにして資料を持ち帰り、標本を作製して研究資料や展示資料に活かすのかという工程や工夫が説明されている。ミリ単位のコケの標本がどのように作られているか、躍動的な動物の剥製がどのように作られているか、それを知ったら実物を見て確かめたくなくなるに違いないだろう。

一方で、考古学のテーマの中では、遺跡から出土した遺物がどのようにして展示に至るのかというところへの言及はそれほど多くない。考古遺物は現代に生きる私たちにとって馴染みのないモノが多いぶん、楽しんでもらうためにはモノの説明と位置づけが必要となるためか、遺物の解説や見方の割合が多くなっている。執筆者の注目点の違いによる影響もあるだろうが、「博物館の楽しみ方」というテーマを揃えたうえでも、それぞれの資料がもつ性格によって取り上げられる話題に違いが見られるということも興味深い。

さらに、本書の魅力の一つとして、多彩なコラムが挙げられる。「なぜ昆虫の標本には針が刺さっている？」や「カエルはいつから飛び跳ねるようになった？」といった豆知識から、標本作製での工夫や苦労話など、様々な話題が随所に織り込まれている。専門的な話の合間にコラムが散りばめられることによって、それぞれの担当者から直に展示解説を聞いているような臨場感が得られ、文章の中の間味を引き立てられているように感じられた。そんな「仕掛け」が組み込まれていると捉えるのは考えすぎだろうか。

この本の導入には、「本書は、博物館とその展示物について、もっと知りたい人や深く学びたい人、観察や標本・レプリカ製作をうまく行いたい人、また、これから学芸員や標本士になりたい人や博物館で働きたい人に書きました。もちろん、すでに博物館に関わっている人にも読んでもらいたいと思います。」との言葉が添えてある。私はこの「すでに博物館に関わっている人」には、仕事などで直接的に博物館に関わっている人だけではなく、通ってくれている来館者の人達まで幅広く当てはまるものだと感じている。見せる側と見る側、両方の世界が広がれば、きっと博物館はもっと楽しい場所になるだろう。そして何より、この本は読んでいるその時から「色々な博物館に行こう、考古や歴史以外のジャンルの展示をもっと見てみたい」と思わせてくれる。最近、考古や歴史の展示以外を見ていないという方は、ぜひ一度手に取ってみてはいかがだろうか。

さて、今度の週末はどんな博物館に行こうかな。

アルカ通信 No.182

発行日	2018年11月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp